ドストエフスキイ研究会便り（4）

道化フョードルの聖書

はじめに

フョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフ ――『カラマーゾフの兄弟』の冒頭で筆者が、「何かある種独自な民族的な桁外れ（ベスタルコーヴァスチ）」と紹介する、「食客」からの「成り上がりの地主」フョードル。二人の妻に生ませた子供三人を次々と「忘れ去り、棄て去り」、我が家を快楽の「巣窟（ヴェルテップ）」と化し、更には宗教的痴愚である知恵遅れの乞食女に生ませたとされるスメルジャコフを、料理係の下男として使う「卑劣漢」の「家長」フョードル。神学生ラキーチンが「情欲が炎症を起こすほど」と断じるカラマーゾフ家の中で、成長した長兄ドミートリイとの間に、「牝犬」グルーシェニカを巡り壮絶な争いを繰り広げる「好色漢」フョードル。「神と不死」の探求者として帰郷した末子のアリョーシャに向かっては、己の不信と不安を正直に告白する「不信の徒（ニヒリスト）」かつ「冷笑家（シニック）」フョードル。またこの天使を前に「あと二十年は男でいる」ことを宣言し、そのため出来るだけ多くの金を貯め込もうとする「吝嗇家」で「享楽的生命主義者」フョードル。更には父親のニヒリズムとシニシズムを受け継ぐ次兄イワンからは「イソップ爺」とも「毒蛇」とも忌み嫌われ、遂にはこのイワンの異母兄弟であり「前衛的肉弾」スメルジャコフによって脳天を叩き割られる「父親」フョードル ―― この男を言い表すべき言葉は実に多いのですが、それら全てを以ってしても究め尽くし難い存在、それがフョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフです。

このフョードルが聖書について語る語り口には、筆者の言葉通り「何かある種独自な」響きが宿り、彼が聖書を殆んど自在とも言うべき鮮やかな手際で用いる道化芝居には驚くべき才知が閃きます。フョードルの聖書知識に分け入ることは、その心の中に「聖なるもの」についての観念が、またその人間観と世界観と歴史観が、否定の方向であれ肯定の方向であれ、如何なる形で存在するのかを探る上での、大きな手掛かりを得ることに繋がるでしょう。そればかりか、広くカラマーゾフ世界の聖書的磁場とは何であるかを知る上での、またドストエフスキイが描き出した異教的原始的とさえ言えるカラマーゾフ的生命力とは何であるのかを考える上での、具体的な手掛かりを手にすることにも繋がると思われます。

「場違いな会合」と題された『カラマーゾフの兄弟』の第二篇。その舞台は「家畜追込町」の郊外にある修道院です。ここにフョードルを始めとして、主要な登場人物のほぼ全員が集結し、死を明日に控えた聖者ゾシマを相手に「神と不死」の問題を巡り、各人がそれぞれの内面を次々と曝け出してゆきます。この息を呑ませる圧倒的な出だしにおいて、注意すべきことに、読者の前には早くも『カラマーゾフの兄弟』の主要テーマのほぼ全てが提示されてしまうのです。

今回我々が光を当てるのはこの「場違いな会合」であり、殊にそこで聖者ゾシマ長老を相手に、フョードルが演じる瀆神的道化芝居です。ここから浮かび上がることは、彼が聖書、殊に福音書を読みこなす視点の「何かある種独自な」異様さ、と言うよりは「桁外れ」なユニークさです。それはただ単に「瀆神的」とか「異教的」とか「原始的」等々の言葉で言い表して片付くものではなく、彼の聖書への切り口そのものが、本来ユダヤ教やキリスト教の出発点にあった荒々しい原初的宗教性、R.オットーの言う「神霊的なもの」、「超越的戦慄感」を我々の存在の底に呼び覚ます類のものであるとさえ思わせます。作者ドストエフスキイは、聖書というものが持つ底知れぬ豊饒さと奥深さと神聖、そしてまた懼しさと不思議と謎を、フョードルの瀆神的道化芝居を通して探り、表現しようとしていたのではないでしょうか

以下に、フョードルの聖書的道化を八つほど検討してゆきたいと思います（目次の１から８に当たります)。これらのエピソードから浮かび上がるフョードルの姿は、それぞれが目を見張らせるようなドラマ性と意味とを帯びさせられていることが明らかとなるでしょう。我々は今回、それらのフョードル像を、順次一つ一つ個別に立ち上がらせることを目標にしたいと思います。この男の全体像を把握することが我々の将来の目標、あるいは夢なのですが、今はそれぞれのフョードル像が互いに矛盾し合い、分裂しているように見えても、急いでそれらの間に統一を求めようとしたり、徒に結論を急いだりすることは避けねばなりません。個別像の検討と全体像の追及。的確なフョードル像を求める上で、差し当たっての有効な方法としては、これら二つの間での往還を繰り返す他ないでしょう。そもそも統一的で整然としたフョードル像を求めること自体が、作者の言う「何かある種独自な民族的桁外れ」たるフョードルその人から嘲笑されかねません。事実作者の造型したフョードルは、この作品における一級の、「煮ても焼いても食えない」登場人物となっており、遂には息子たちからその脳天を叩き割られることで、「一粒の麦」の死の逆説を担う存在、カラマーゾフの世界に一人屹立し、独自の光芒を放つ存在なのです。今回は上に記したように、「瀆神的道化芝居」という角度からの、フョードル理解に向けた「試行錯誤」の試みとして本論を位置づけたいと思います。

２０１６年6月２８日

道化フョードルの聖書

目次 **［ページ］**

1. ルカ福音書（1）　「主よ、今こそ」　３～４
2. 旧約詩篇　「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり」　４～７
3. ルカ福音書（2）　「幸福なるかな、汝を宿せし胎」　８～１０
4. ルカ福音書（3）　「われ永遠の生命を嗣ぐためには」　１０～１３
5. ヨハネ福音書　「汝らは己が父悪魔より出でて」　１３～１５
6. ルカ福音書（4）　「この女の多くの罪は赦されたり」　１５～２０
7.「最後の一幕」　悪魔の系譜、フョードルからイワンとスメルジャコフへ　２０～２３
8. フョードルと「聖母マリア」との対決　２３～２７
おわりに　２７～２９

1. ルカ福音書（1）　「主よ、今こそ」

二つの「駆け落ち」

食客フョードルの最初の結婚。この男が本来は高根の花でしかなかった富裕な地主の娘アデライーダを獲得し、その持参金の大部分をせしめることができたのは、ひとえに彼女の内に流れるロマンチズムの血に訴え、彼が「駆け落ち」という伝家の宝刀に訴えたことによる。ところがその後今度はアデライーダが、本家ロマンチズムの血を奪われてなるものかとばかりに、夫フョードルと三歳になる息子ドミートリイとを棄て、神学校出の零落した教師との「駆け落ち」という手段に訴え、ペテルブルクに身を隠してしまうのだ。妻に逃げられた夫。この悲劇的かつ喜劇的立場に立たされたフョードルは、世間に対して「道化」としての自分を曝し続け、やがてアデライーダ死去の報に接するや、往来に躍り出て、両手を天にかざし、悲しみとも歓喜ともつかぬ叫びを発する。この時彼が用いるのが、ルカ福音書冒頭のイエス生誕にまつわるエピソードから採られた、老預言者シメオンの叫びである。

「主よ、今こそ御言葉に従ひて僕を安らかに逝かしめ給ふなれ」（ルカ二 29）

歓喜と悲嘆の境

ルカ福音書の第一章と第二章が伝えるのは、洗礼者ヨハネと救世主イエス生誕の天上的喜びの様々なエピソードであり、人間に救済をもたらした神の愛と恩寵への讃美である。それらの中でフョードルが用いるのは、神による人間救済劇がいよいよ開始された祝宴感

覚の中、待望のメシヤ生誕に接した老預言者シメオンが神に向かい発する叫びだ。この叫びの中にある複雑で味わい深い感情。待望の救世主にようやく出会えた歓喜と神への感謝、そしてとうとうその出会いを果たした老いた身に迫る死の受容と、この世の生からの解放。J.S.バッハはこの老預言者シメオンの心を、生と死、深い喜びと悲しみの交錯する見事なカンタータとして表現している(Ich habe genung「我、満ちたれり」、1727、BWV82)。フョードルは、妻の死により自らの生が一つの頂点を迎え、格好の「見せ場」到来と見るや、自分自身をこの老預言者シメオンに重ね、往来に飛び出し、歓喜とも悲しみともつかぬ絶妙な自虐的道化的叫びを発するのである。

忘れてならないのは、この叫びに重ねて作者が報告するフョードルの現実の生である。それは妻が残した幼児ドミートリイを「忘れ去り、棄て去り」、自らの住まいを快楽の「巣窟(ヴェルテップ)」と化した「好色漢(スラダストラースニク)」が日々送る、酒と女と金にまみれた破天荒な生の享楽の姿だ。ルカが記すシメオンの叫び、イエス生誕と自らのこの世からの解放・別れとを交錯させた老預言者の叫びに対し、イエスの生誕ならぬ妻の死と自らの解放・喜びとを交錯させたフョードルの叫びとは、聖書の神聖劇を巧妙に換骨奪胎させた叫びであり、ここにあるのは生と死、聖と俗、歓喜と悲嘆との境界を定かとしない、否、恐らくはそれら両者を意図的に交錯・逆転させての異教的瀆神的道化芝居と言うべきものである。遠く洗礼者ヨハネと救世主イエス生誕の天上的祝祭の場にまで遡り、そこに展開したドラマを素材に、見事な道化芝居を打って人々を煙に巻き、密かに一人ほくそ笑むフョードル。その「だぶついた喉仏」と、「鋭く鉤状のローマ鼻」と、「肉感的で大きな唇」と、その間から垣間見える「黒い欠け歯」――ドストエフスキイの筆が描き出す、「道化」フョードルの相貌である。

このエピソードを序曲とするかのように、フョードルはゾシマ長老との会見の場(「場違いな会合」)に乗り込み、長老を相手に旧約新約の聖書知識を駆使し、次々と破廉恥な道化芝居を演じるであろう。『カラマーゾフの兄弟』第二篇「場違いな会合」とは、父フョードルと長男ドミートリイとの金と女とを巡る紛争の、ゾシマ長老による調停の場という第一の側面に加えて、否、それ以上に聖書を挟んでのゾシマ長老とフョードルとの、そして更にゾシマと次男イワンとの熾烈な戦いが繰り広げられる場であることも忘れてはならない。その他長男ドミートリイに対するゾシマの跪拝という驚くべき振る舞い。リーザとゾシマ長老との対話。「信仰心の薄い婦人」、つまりリーザの母ホフラコワ夫人とゾシマとの対話、また「信仰心の篤い農婦たち」とゾシマとの、死を超えた「永遠の生命」を巡っての対話等々――全てが作品の構成上忘れてはならない重みを持つエピソードである。(これらゾシマ長老と登場人物たちとの対決と、その構造については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』第Ⅰ~Ⅴ章を参照)。

2. 旧約詩篇　「愚(おろか)なるものは、心(こころ)のうちに、神(かみ)なしといへり」

ディドロと旧約聖書

ゾシマ長老の草庵に乗り込んだフョードル。彼が手始めに長老を相手に発する「場違いな」駄洒落、言葉遊びについては省略しよう。この駄洒落を名刺代わりのように差し出したフョードルは、その昔貴族の許に居候をし、「食客」として「ただ飯を喰らっていた」頃から自分が「道化」であり、「宗教的痴愚」のようなものであったと打ち明け、更に自分の身体の内には「けちな」「悪魔」が住み着いているのかも知れないと嘯いてみせる。悪魔への言及が呼んだ連想であろう、話題は次に信仰の揺れに移り、自分がディドロと同類の者であるとする彼は、この無神論哲学者について「一口話」の披露に及ぶ。

> 「エカチェリーナ女帝の御代でございます。長老さま、哲学者のディドロがプラトン主教を訪問した話はご存知でございましょうか。入るなりディドロは、いきなり「神なし」と言ってのけたのだそうでございます。これに対し、偉大なる主教さまは指を一本立て、お答えになったのだそうでございます。《愚(おろか)なるものは、心(こころ)のうちに、神(かみ)なしといへり》。これを聞くやディドロは、主教さまの足元にひれ伏し、《信じます。洗礼も受けます》と叫び、その場で洗礼を受けたのだそうでございます」(二２)

地主貴族の偽善

この話を聞いた地主ミウーソフは猛烈な怒りに駆られ、抗議をする。このミウーソフとフョードルとの確執・面当てが、「場違いな会合」を縦に貫く小さな縦糸であることを頭に置いておこう。この抗議に対してフョードルは、話の最後の部分、ディドロの洗礼については自分のでっち上げであることを認める。だがフョードルによれば、ディドロの無信仰についての「一口話」自体、彼がここの地主たちの許に居候をしていた頃、繰り返し聞かされたものに他ならず、その中にはミウーソフの伯母もいたとの暴露に及ぶ。地主たちが当時、ディドロの挑戦を即座に退けたプラトン主教の信仰を賞讃したのか、逆にこの啓蒙主義哲学者の無神論に心を寄せていたのか、必ずしも明らかではない。恐らくフョードルは、地主貴族たちの「一口話」が、このような曖昧さの上に立つ軽薄なものであったこと、彼らの外面の信仰と内面の現実とが解離していた偽善を暴露し、皮肉ったと考えるのが真実に近いであろう。この土地きっての大地主ミウーソフの怒りも、決して故(ゆえ)なきものではなかったのだ。

「愚かなるもの」の射程

注目すべきはフョードルが言及した聖句、主教がディドロにぶつけた詩篇の一節である。「愚(おろか)なるものは、心(こころ)のうちに、神(かみ)なしといへり」。これは旧約の詩篇において繰り返される数多くの印象的な表現の中でも、極めてユダヤ的なものの一つと言えるであろう。ユダヤ民族が追いやられた筆舌に尽くし難い長い苦難の歴史の中で、ひたすら神の助けと救いを待ち望み、その慈悲と憐みを求める民の叫びと祈りを歌い続けたのが詩篇作者である。

（その真偽はともかく、全百五十篇の殆どがダビテ作とされる）。それらの叫びと祈りの中から、フョードルが用いたのと同じ表現が含まれる典型的な一篇を挙げておこう。

「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり。かれらは腐れたり。かれらは憎むべき不義をおこなへリ。善をおこなふ者なし。神は天より人の子をのぞみて、悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひしに、みな退きてことごとく汚れたり。善をなすものなし一人だになし。不義をおこなふ者は知覺なきか。かれらは物くふごとくわが民をくらひ、また神をよばふことをせざるなり。かれらは懼るべきことのなきときに大におそれたり。神はなんぢにむかひて營をつらぬるものの骨をちらしたまへばなり。神かれらを棄たまひしによりて汝かれらを辱かしめたり。願くはシオンよりイスラエルの救のいでんことを。神その民のとらはれたるを返したまふとき、ヤコブはよろこびイスラエルは樂しまん」（詩篇 53）

（『舊約新約聖書』、日本聖書協会、1967）

この第 53 篇以外にも、同様の趣旨の歌・表現は第 14 篇を始めとして詩篇に少なくない（第 10・36・42・51・73・94・115 篇等々）。それらにおいて歌われるのは、まずは神エホバに叛き、ユダヤ民族に苦しみをもたらす強大な異民族、「愚なるもの」への怒りと裁きと報復、即ち彼らの絶滅と滅亡、いわゆる「聖絶」を訴える熱烈な祈りである。更にそれらの歌はユダヤの民自身の内にも見出される「愚なるもの」、つまり神の前に「腐れたる」もの、「汚れたる」もの、「不義をおこなふ」もの、「智覺なき」ものにまで対象を広げてゆく。つまりここに歌われる「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり」とは、ユダヤの様々な敵ばかりかユダヤ民族自身をも含め、広く「人の子」の魂が宿す「愚」さ、その罪と傲慢と怠惰さや、反逆と不信の心を表現し、更にそれを弾劾し裁き去る叫びでもあるのだ。そしてこれら詩篇は、紀元前の世界から遥か遠く時間空間を隔てて、十八世紀のフランスから更に十九世紀ロシアへと及び、今や家畜追込町フョードルの道化の武器として用いられるに至ったのだ。フョードルの「一口話」、旧約聖書を用いた道化は、先のルカ福音書における救世主生誕の祝祭空間を更に遠く遡り、「怒りと裁きの神」の「聖絶」という歴史的奥行きを背景とし、強力な毒性を帯びた批判力を獲得するに至ったと言えよう。

フョードルの修業時代

さて旧約聖書とフョードルとの関係を考える時、もう一つ忘れてはならない要素がある。彼とユダヤ人との関係である。後にも見るが筆者は、フョードルがアデライーダに次ぐ二番目の妻、つまりイワンとアリョーシャの母ソフィアと出会ったのは、ある儲け仕事のことでユダヤ人と組んで、他県に赴いた時であったと記す。更に彼はこの妻の死後三-四年してからロシアの南部に赴き、最後にはオデッサに腰を据え、数年間を過ごしたことが記される。ロシア南部とはユダヤ人隔離政策により、ロシアのユダヤ人たちの多くが移り住ま

わされた地域である。これらの地でフョードルは、最初は「種々雑多なジューたち」と、次にはそれらの中でも特権的な地位を持つ「ヘブライ人たち」とも付き合い、ひたすら金儲けの腕を磨いたことが仄めかされる。彼が家畜追込町に戻ったのは、アリョーシャが帰郷する三年ほど前のことでしかなかったのだ。アリョーシャの出家に至る魂の激しいドラマ、そしてイワンの「大審問官」と「地質学的変動」に至る長く厳しい思索の道程。これらモスクワで展開した兄弟二人の「神と不死」探究のドラマの向こうで（「研究会便り（３）」、「イワンとアリョーシャの聖書 ―モスクワ時代、イエス像構成の一断面―」を参照）、南部ロシアでもまた、恐らくは十年近くの期間、ディアスポラのユダヤ人たちを師とする、父フョードル独自の「修業時代」が展開していたのである。

それがフョードルの金儲けの修業であったことはまず間違いないであろう。だが彼が家畜追込町にいる間に商売でユダヤ人と付き合い、またその後南部ロシアの様々なユダヤ人の間で暮らし、商才に一層の磨きをかける間に、この人々が民族的苦患の中で遠き「シオンの地」にいますエホバ神を慕い、熱烈な祈りを捧げ続ける民であることを肌身に知るに至ったことは想像に難くない。今見たようにユダヤの民とは、自分たちを虐げ脅かす異民族の不信仰と、自分たち自身の内に潜む不信の心にも厳しい目を向け、その現実を「愚(おろか)なるものは、心(こころ)のうちに、神(かみ)なしといへり」という詩句に凝縮させ、その「愚かなるもの」の「聖絶」をエホバ神に訴え、かつ祈り続けてきた民である。フョードルはこの姿を身近で知り、それを自分自身の現実と認識にも重ね、人間への厳しい批判の眼・シニシズムを育んでいったと考えることも不可能ではないだろう。

道化の根と標的、その奥行き

かくして詩篇を用いたフョードルの道化芝居とは、その背後に彼自身とユダヤ民族の長い歴史を宿すものとして立ち現れてくる可能性がある。つまりこの上ない好色漢かつ吝嗇漢かつ飲んだくれの彼が、その一方で世間や自分自身に向けていたのは、「食客」時代ばかりか、ユダヤ人たちの間での「修業時代」にも培った眼であり、「愚(おろか)なるもの」の内に潜む「神なし」の現実、殊に地主貴族たち支配階級の「腐(くさ)れたる」「汚(けが)れたる」「智覺(さとり)なき」心、また信仰深い人間の内にさえ潜む不信、つまりは広く人間が宿すニヒリズムと偽善を見抜く鋭利で辛辣な眼差しであった可能性が浮かび上がるのだ。彼の息子イワンは、これを「人間の中の悪魔性」と呼ぶであろう（五５）。作者ドストエフスキイは、かくの如きニヒリズムとシニシズムとを抱えたフョードルを「聖者」ゾシマ長老の前に立たせ、詩篇を用いた瀆神的道化芝居を以って、ミウーソフを始めとするロシアの地主貴族たち、そしてゾシマ長老の属する修道院を相手に、彼らが宿す偽善と欺瞞に毒の礫を投げさせたと考えられるのである。新約から旧約へ。フョードルの道化芝居が地下に張る根は深く遠く、その毒性は強い。

3. ルカ福音書（2）　「幸福なるかな、汝を宿せし胎」

ガリラヤの一女性に託して

さて生誕から遥か時が経って成長したイエスが、ガリラヤ各地で弟子たちと共に「神の国」の宣教に打ち込んでいた頃のことである。ルカ福音書は、群衆の中の一女性が感極まってイエスに向かい、次のような歓声を上げたと記す。

「幸福なるかな、汝を宿せし胎、なんぢの哺ひし乳房は」（ルカ十一 27）

フョードルはこれを驚くべき表現に変え、ゾシマ長老にぶつける。

「幸福なるかな、汝を宿せし胎、なんぢの哺ひし、乳房は。殊に乳房こそ！」（二 2）

先のイエス生誕に際して老預言者シメオンが上げた歓喜の叫びに続き、フョードルがここで焦点を合わせるのは、ガリラヤの一女性のイエスに対する感動であり、イエスの母マリアに対する讃美の叫びである。注目すべきはこの女性が発した叫びが、先の老預言者シメオンの叫び（二 29-32）に先立ちルカが報告する、聖母マリアによるヨハネの母エリサベト訪問の場面（一 39-45）と呼応するという事実である。つまりマリアがエリザベトを訪問した際、胎の内にイエスを宿すマリアの挨拶を聞くや、エリザベトの内で胎児ヨハネが飛び跳ね、聖霊に満たされた彼女はマリアに向かい、大声で次のように叫んだとされるのだ。

「おんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の實もまた祝福せられたり。わが主の母われに來る。われ何によりてか之を得し。視よ、なんぢの挨拶の聲、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びをどれり。信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり」（ルカ一 42-45）

「幸福なるかな」（μακαρια）

ガリラヤの女性と洗礼者ヨハネの母エリザベトが、共に用いた「幸福なるかな」（μακαρια）。フョードルはここで、自らをこれら二人の女性に重ね、マリアとイエス聖母子への讃美の叫び「幸福なるかな」を、ゾシマ長老にぶつけてみせたと考えられる。しかもここでフョードルは、聖母マリアの「女性」としての受胎と出産、そして育児・哺乳を意図的に前面に押し出し、大胆にも聖母マリアの「胎」への言及に加え、更に句読点までつけ加え、重ねて「乳房」を強調する。聖母マリアさえもが地上的・肉的・性的な存在として、つまりは「女」として讃美の対象とされると共に、道化の道具ともされ、聖者ゾシマにぶつけられたのだ。「場違いな会合」を舞台とする「好色漢」フョードルの面目躍如たる瀆神的道化芝居、「聖」と「俗」の境界を打ち破る、恐るべき「一線の踏み越え」で

ある。作者は当のゾシマ長老を始めとして、その場に居合わせた人々が如何なる反応をしたか、報告をしない。そこにあったのは、ただの笑いであろうか。

天上的祝祭劇とスキャンダル

さてここで我々は、フョードルの聖書に向ける目が、「胎」や「乳房」を持つ「女」としての聖母マリアに向かうだけの、「好色漢」の目だとして眉を顰めるだけでは、自らを小さな常識人の枠に閉じ込めてしまい、この「何かある種独自な民族的な桁外れ」の十全な理解には至り得ないであろう。フョードルが用いたルカ福音書の冒頭二章で報告される、洗礼者ヨハネと救世主イエス誕生の天上的祝祭の物語とは、改めてヨハネの母エリサベトとイエスの母マリアに焦点を合わせる時、実は前者は石女(うまずめ)の老女の懐胎、後者はうら若き処女の懐胎という、天地の逆転したこの上なくスキャンダラスな奇跡物語の相も持つのだ。そればかりではない。彼女たちの夫に目を向けても、前者はザカリアという年老いた祭司、後者はヨセフというその生と死の詳細も定かではない大工である。更にまたシメオンは老預言者、シメオンに続き神殿でイエス生誕への讃美を唱えるアンナも八十四歳の老預言者である。紀元以降二千年にわたる人類救済史の中核をなしてきたキリスト教の出発点に存在したのは、ルカによれば、これら石女(うまずめ)の老女と老いた祭司からの洗礼者ヨハネの誕生、また未婚のうら若き処女とガリラヤの一大工からの救世主イエスの誕生、そしてこれらの奇跡を神殿でひたすら待ち続けた老預言者たちという、人間の生と死、老いと若き、男と女、そして聖と俗に関する常識を大きく覆す奇跡的事件(スキャンダル)だったのである。

ルカ福音書を介し、「好色漢」フョードルの瀆神的道化芝居が焦点を絞り込んだのは、このような不思議と謎を孕む洗礼者と救世主の生誕物語であり、かくして彼の道化芝居とは単に聖書を舞台とした人の度肝を抜く好色的瀆神的テーマの提示としてあるばかりではなく、人間の生と死と性に関する、「聖と俗」の常識と埒を大きく打ち破る驚きと神秘、そして豊饒と祝祭の原初的生命感を帯びた磁場であるとさえ言えるであろう。フョードルが如何にして聖書のこのような部分に目を注ぐことになったのか、その理由を単に「好色漢」としての彼に求めることは、我々自らの感受性と思索力の矮小さを証するだけであり、彼の道化芝居が持つスケールの大きさと意味の奥行きを見失ってしまうことになるであろう。「何かある種独自な民族的桁外れ」――筆者が冒頭で記すように、フョードルが新約と旧約両聖書に注ぐ目と理解力には、只ならぬものがあると考えるべきであろう。

カラマーゾフとスキャンダル

ここから改めて『カラマーゾフの兄弟』に目をやる時、そこに広がるのは旧約新約の世界に留まらず、更に「独自」で「桁外れ」な世界であるとさえ言えるであろう。

スメルジャコフの誕生を巡る、好色漢フョードルと宗教的痴愚たる乞食女スメルジャシチャヤとの、誰も決して真実を摑み切れない謎と醜聞。それに先立つ下男グレゴーリイとマルファ夫妻を巡る、六つ指の赤ん坊「竜(ドラコン)」の誕生と死という痛切な悲劇。更にその六つ

指の子が死んだ夜、臨月の腹を抱えたスメルジャシチャヤが、フョードル邸の高塀を攀じ登って風呂場に辿り着き、自らの命と引き換えに産み落としたスメルジャコフを、「神様からの贈り物」として自らに引き受けるグレゴーリイとマルファ夫婦の胸を打つエピソード――これらフョードルを中心に次々と引き起こされる怪奇で戦慄的な醜聞、誕生と死と性にまつわる「桁外れ」な物語、グレゴーリイが「自然界の混乱」と呼ぶ出来事は全て、ルカ福音書が伝える聖にして異様にして、また豊饒さと不思議に満ちた奇跡的生誕物語と呼応し、更にはそれを超えたところに展開する世界と言う外なく、それらは我々読者をカラマーゾフ世界がその奥底に帯びる戦慄的電荷に触れさせ、神秘の淵へと呼び込まずにはいない。

グレゴーリイは、自らの投げ込まれた悲劇を「自然界の混乱」と呼び、これを機に彼の内部では「神さまのこと」が開始されたと記される。つまりこの下男は、自らが捲き込まれた一連の悪魔的悲劇を契機として、『ヨブ記』や『殉教者列伝』や、殊に『シリアの聖イサクの苦行説教集』などの聖なる書物を、殆ど何も理解出来ぬままに何年間にもわたり読み耽ったのである。「自然界の混乱」が呼び起こす「神さまのこと」。グレゴーリイが表現するものとは、フョードルがカラマーゾフ世界にまき散らす醜聞・混乱を正面から受け止め、その混乱の向こうに神の真理を見出そうとする、信の逆説と言うべきものであろう。我々の小さな常識の枠を打ち破る「醜聞」・「自然界の混乱」を、フョードルを通して次々と提示する一方、作者ドストエフスキイは『カラマーゾフの兄弟』の根底に、ロシア民衆の信の堅固さと奥深さを代表し象徴するグレゴーリイと、その「神さまのこと」に向かう姿を置いたと考えられるのである。

同じことを再度繰り返しておこう。フョードルが凝視する聖書世界、また彼がその瀆神的道化芝居によって次々と引き起こす醜聞・混乱の世界とは、我々人間の常識的思考の枠を大きく転覆させる場である。だがそれと同時に、その混乱の底から初めて、人間の生と死と性に関する聖性と豊饒が現われ出る場、「神さまのこと」が人間の心に降り立つ逆説の場でもあるのだ。上に記した、カラマーゾフ世界がその奥底に帯びる戦慄的電荷とは、正にこの逆説を生む力であると考えるべきであろう。

4. ルカ福音書（3）　「われ永遠の生命を嗣ぐためには」

対決

フョードルからゾシマに向かい、新たな問いが発せられる。

「師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか？」（ルカ十25）

先の老預言者シメオンと聖母マリアから、焦点は大きく移動する。ここでフョードルは

「師よ」と呼びかけることで、今や聖者ゾシマを正面からイエスと重ねるのだ。この道化が新たにぶつけるのは、その後に行われる長老とホフラコワ夫人との対面の場で、夫人が発するのと同じ問いである。つまり「神」の存在を巡る問いと共に、この作品において主人公たちが常に発し続ける核心の問い、死を超えた「永遠の生命」を巡る問いである。これは単なる道化的問いというよりは、修道院でひたすら「神と不死」を求め、「キリストの御姿」を守り続けてきたゾシマ長老に投げつけられた正面きっての挑戦であり、「場違いな会合」における最初の、しかも決定的な対決の火蓋がここに切って落とされたと考えるべきであろう。

「世界的な」「永遠の」喫緊の問い

「永遠の生命」を巡る問い、これはフョードルの息子イワンが正面から発する問いでもある。前回も扱ったように（「研究会便り(3)」、「配布プリント」。拙著『カラマーゾフの兄弟論』の冒頭も参照）、イワンは故郷の料亭「みやこ」で弟のアリョーシャに言う。

> 「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。［中略］そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？　他でもない、神はあるかとか、不死は存在するかとかいう世界的な問題なのだ」（五３、「肯定と否定」）

フョードルとイワン。この後で我々は、ヨハネ福音書を用いたフョードルの瀆神的道化を検討し、フョードルからイワン・スメルジャコフへと連なる「悪魔の系譜」について検討をするであろう（5、9）。だが『カラマーゾフの兄弟』においては「神と不死」の問題が、ゾシマ長老やアリョーシャのみの独占する問題ではなく、これら「悪魔の子」たちの中心テーマとしても存在するところに、この作品の「独自」で「桁外れ」な奥行と深さがあることをここに確認しておこう。

福音書の磁場の中で、善きサマリヤ人

「神ありやなしや？」そして「死を超えた永遠の生命はありやなしや？」――『カラマーゾフの兄弟』全篇を通して、登場人物たちそれぞれが繰り返し問い続ける、これら二つの「世界的な」「永遠の」喫緊の問い。中でも第二篇の「場違いな会合」において、フョードルとホフラコワ夫人が期せずして共に発する「不死」、即ち「死を超えた永遠の生命」を巡る問いとは、具体的に新約聖書の中に典拠を求めると、ルカ福音書の「善きサマリヤ人」の譬えにおいて、イエスが示す「隣人愛」の教えの導入部に置かれた問いである（十 25-29/30-37）。前後の文脈も確認しておこう。

イエスを試みようとする「或る教法師(律法学者)」が問いをぶつけてくる。「師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか」（十 25）。律法学者に対して、イエスは問い返す。律法には何と書かれているか、質問者自身はどう読んでいるか。すると律法学者は［旧

約］聖書の聖句を以ってこう答える。

> 「なんぢ心を盡し、精神を盡し、力を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし。また己のごとく汝の隣を愛すべし」（ルカ十 27//申命記六 5、レビ記十九 18）

神への愛と隣人への愛。この男の律法に関する模範的な解釈・解答を受けて、イエスは言う。「なんぢの答えは正し、之を行へ、さらば生くべし」。しかし「おのれを義とせん」と欲する律法学者は、頭の中に律法の教えを正しく納めてはいるものの、「おのれ」にこだわり、具体的な隣人のことが思い浮かばない。そこで彼は問い返す。「わが隣とは誰なるか」。この問いに対し、イエスの口から語り出されるのが「善きサマリヤ人」の譬えである（同 30-37）。聖書テキストの内でこれを追うことは、ここでは省略しよう。

長老の裁き

ゾシマ長老の前に次々と様々な人物が立ち現われ、その心の内を曝け出す「場違いな会合」。ここで「永遠の生命」に関する問いを投げつけるのは、フョードルとホフラコワ夫人である。イエスに向き合った真面目な律法学者とは違い、これら二人が日々送るのは「神と不死」の探求からは程遠い世俗の塵にまみれた生活なのだ。だがこれら二人の内にも「永遠の生命」に関する問いはなお消えず脈打ち、たとえその問いが現われ出るのは世間話や道化芝居の形でしかなくとも、彼らもまたアリョーシャやイワンと同じ「ロシアの小僧っ子」なのであり、ドストエフスキイはその二人をゾシマ長老の前に立たせるのだ。

注目すべきは、これを受けたゾシマの応答だ。新たな問いの聖書的出所を熟知する長老が返すのは、律法学者に対するイエスの応答に劣らず厳しい応答であり、それは続くホフラコワ夫人に対してと同じく、「自分自身に対して嘘をつかぬこと」という警告である。

> 「大切なことは、自分自身に対して嘘をつかぬことです。自分自身に対して嘘をつき、自分自身の嘘に耳を傾ける者は、果てに自分の内においても周りにおいても、何ら真実というものが見分けられなくなり、そして恐らくは自分に対しても他人に対しても、尊敬を抱けなくなる迄に至ってしまうのです。誰に対しても尊敬を抱けなくなって、愛することも止めてしまい、愛も持たずに、自分を楽しませ気を紛らわせようとして、情欲や卑猥な快楽に溺れ、遂には畜生も同然の所業に走るようになるのですが、それも全ては、他人に対して自分に対して、嘘をつき続けることから出ているのです」（二 2）

存在の嘘、フョードルとホフラコワ夫人

フョードルから吐きだされる言葉の一つ一つ、それが如何に人の意表を衝くものであろ

うとも、「真実」に根を置くことのない「嘘」であり、自分をも他人をも「尊敬」することから遠く、その生は「愛」からも、つまり「隣人愛」「実行的な愛」の実践からも遠いばかりか、彼の存在そのものが道化的虚偽となり、ただ「情欲や卑猥な快楽」の追求に向かい、結局は「畜生」への道に繋がるものでしかないことを、ゾシマは警告したのである。

長老の前に相次いで立つフョードルとホフラコワ夫人。この親たちの存在の奥深くに根を張った「嘘」、そしてシニシズムとニヒリズム。その虚偽が完膚無き迄に見抜かれ、死にゆく長老から厳しい警告、否、最後の裁きの判決が言い渡されたのである。長老は、フョードルもホフラコワ夫人も共に「心を盡」さず、「精神を盡」さず、「力を盡」さず、「思を盡」さずして、「主たる汝の神を愛」さず、また「己のごとく汝の隣を愛」さぬことを見抜いたのだ。そしてゾシマはフョードルが、自らの存在そのものを虚偽の内に沈めさせていること、結局は「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり」と詩篇作者が糾弾した存在に他ならないとの、決定的な裁きを下したのである。フョードルを裁き去るゾシマ長老。この厳しい視線も、フョードル像の構成において、我々が決して忘れてはならないものであろう。

フョードルの反撃が始まるのは、正にここからである。

5. ヨハネ福音書　「汝らは己が父悪魔より出でて」

「嘘の子」、フョードルの反撃

存在が宿す「嘘」。ゾシマ長老の裁きと警告に対し、直ちにフョードルは言い返す。表面的には慇懃な態度から洩れ出るのは、ゾシマ長老に対する正面切っての反撃の意志だ。「居直り」である。彼が拠って立つのは、今度はヨハネ福音書だ。自分は生涯にわたり毎時毎瞬「嘘」をつき続けてきた。「まことに嘘は嘘の父なり」であり、自分は「嘘の子」であっても構いはしない。ゾシマ長老の裁きと警告を、彼は聖書を典拠に正面から受けて立ったのだ。ルカからヨハネへと福音書を自在に使いこなし、あるいは都合よく利用しての、一筋縄ではいかぬ、見事と言うべき道化的切り返し、居直りと言うよりは逆襲である。彼が新たに典拠とするヨハネ福音書第八章、そこでイエスが「ユダヤ人たち」に対してぶつける痛烈な批判を見ておかねばならない。この聖書テキストをフョードルが如何に自分流に読みこなし、それを自家薬籠中の物としているかが明らかとなろう。

> 「汝らは己が父悪魔より出でて、己が父の慾を行はんことを望む。彼は最初より人殺なり、また眞その中になき故に眞に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり」(ヨハネ八 44)

「汝らは己が父悪魔より出でて」。ヨハネ福音書は、ユダヤ人たちをイエスの敵として正

面から打ち出す。ヨハネのイエスは敵対するユダヤ人たち、自分を十字架上の死に追いやろうとするユダヤ人たちを、「己が父悪魔より出でて」と断じ、いわば「悪魔の子」として痛烈この上ない裁きと批判をぶつけるイエスである（周知の如く、その歴史的帰結が遠くナチスのユダヤ人大量虐殺にまで及ぶことは、恐るべき悲しむべき事実である）。フョードルはこのヨハネが伝えるイエスのユダヤ人批判に、アイロニカルな自己認識を重ね合わせ、自分自身を「嘘の子」「虚偽者」としてゾシマの前で居直ったのだ。つまりフョードルは、敢えて自らの出自を「天なる父」とは対極のもう一人の父「己が父悪魔」であるとし、自分はその血を受け継ぐ「悪魔の子」であり、「眞その中になき」「嘘の子」であるとして人々の笑いを誘い、破廉恥かつ露骨な居直りを決め込むことで、ゾシマ長老への逆襲を試みたのである。己の悪魔的素性（アイデンティティ）の証明根拠としてヨハネ福音書を用いる、ここにいるのもまた「並外れた」瀆神的道化フョードルである。

「悪魔の子」、ユダヤ人と重ねて

先に確認したように、筆者はフョードルが二番目の妻ソフィアとの出会いの時点から、既にユダヤ人と組んで仕事をしていたと記し、更にソフィアの死後はロシア南部に赴き三余年を過ごし、その後はオデッサに住み着き数年間、ユダヤ人社会に出入りして金儲けの才覚を磨いていたと報告する。改めて時系列的な確認をしよう。ソフィアの死はアリョーシャが三歳の時であり、詳しい事情は省くが、母の死から三ヶ月後、彼と兄のイワンは養育者に引き取られ、家畜追込町を去ることになる。アリョーシャの故郷への帰還は十七歳の時、フョードルの帰還もその三年ほど前でしかなかったとされる（一４）。フョードルが家畜追込町を離れていた期間は、十年近くに上る可能性もあると考えてよいだろう。フョードルは、ロシア南部のディアスポラのユダヤ人社会に入り込み、相当期間彼らの下で「修業時代」を送ったのだ。

そのフョードルが、ヨハネ福音書のイエスがユダヤ人を指して呼んだ「嘘の子」という言葉を自らに重ね、ゾシマに向かうのである。イエスから「悪魔より出でて」と弾劾されるユダヤ人、その後祖国を失い世界中に離散し、筆舌に尽くし難い辛苦を味わわされ続けてきたユダヤ人に自らを重ねるフョードル ―― このフョードルの背後には、自己嘲笑の道化性と共に、否、それ以上に自身の体験からくる人間社会とキリスト教に対する、そしてその裏に潜む偽善性と暴力性に対する鋭利な洞察と嘲笑、またそれらへの暗い叛逆の心が潜んでいると考えることも許されるであろう。先に見た旧約詩篇の利用が（「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり」）、ロシアの上流階層ばかりか、およそ人間全てが内に宿す「愚かさ」を標的とした道化芝居であったとすれば、このヨハネ福音書を用いた道化とは、自らを「嘘の子」として「悪魔の子」ユダヤ人と重ねる居直りであり、世とゾシマ長老とキリスト教に対する正面からの逆襲であり挑戦であるとさえ考えられるであろう。ここから浮かび上がるのは、聖書語句を存在の深みにまで組み込み、それを自分自身をも含めた世に対する、聖者ゾシマに対する、そしてゾシマが修道院で守る「キリストの御姿」に対す

る、巧緻と毒に満ちた逆襲と挑戦と嘲笑の武器として用いるフョードルの、恐るべき瀆神的道化の姿である。

悪魔の系譜

「毒蛇(ガート)」。これはイワンが、フョードルとドミートリイ父子の戦いを指して用いた言葉だ。「二匹の毒蛇が互いを喰い合っている」（三９）――この「毒蛇」は、鋭利な牙で狙った相手に噛みつき、その牙から密かに聖書より吸い取った毒を注入し、その毒がどこまで相手の心に沁み込むかをじっと伺うのだ。この男をただの卑猥で吝嗇で破廉恥な道化芝居の演者と見做すならば、彼はその相手を聖書についての無知と偽善、人間心理についての皮相な理解ゆえに嘲笑し、興味を失い、そして立ち去ってしまうであろう。聖書を素材に自らを嘲笑させ、逆に相手を嘲笑し去る。道化フョードルにとって聖書とは、それへの反応によって人間の真偽深浅を見極める試験紙であり、その点でイエスと「キリストの愛」を追い求め、聖書と真摯直截に向き合うアリョーシャとイワン、これら「ロシアの小僧っ子」たちの正に裏返しの存在、逆射影像が父フョードルであると言えよう。

そのフョードルが乗り込んだのは、「己が父悪魔」にとり敵の総本山たる修道院であり、しかもそこで聖者として崇められるゾシマ長老の草庵であった。この聖者と正面から対峙して演じられる道化芝居を、更に広い視野の下に眺める時、そこに見出されるのは、間もなく開始されるゾシマ長老と、フョードルを正に「己が父」とするイワンとの対決であろう。「己が父悪魔より出でて、己が父の慾を行はんことを望む」―― 悪魔からフョードルを経てイワンへ、そしてイワンからスメルジャコフへ。『カラマーゾフの兄弟』における「聖なるもの」否定の系譜、悪魔の系譜がここに浮かび上がってくる。この問題に関しては、以下の6と7において、フョードルが長老の草庵でなお繰り広げる道化芝居を最後まで見届けた上で、改めて考えることにしよう。

6. ルカ福音書（4）　「この女(おんな)の多(おほ)くの罪(つみ)は赦(ゆる)されたり」

ドミートリイの登場

さてスメルジャコフを除き、カラマーゾフ家の全員がゾシマ長老の草庵に集結する「場違いな会合」。今まで見てきたようにこの集まりは、ゾシマ長老が「道化爺」「悪魔の子」フョードルとの対決を、「自分自身に対して嘘をつかぬこと」との厳しい警告を以って切り上げ、次いで「信仰心の篤い農婦たち」を慰め、更に「信仰心の薄い婦人」ホフラコワとの対話に続き、この会合のハイライトたるイワンとの対決を終えるや、終章に向かう（ゾシマ長老とイワンとの対決については、『カラマーゾフの兄弟論』第Ⅴ章５を参照）。ここでいよいよフョードルの目下の仇敵、長兄のドミートリイが登場し、グルーシェニカを巡って父と子との間には案の定、狂乱の一幕が演じられる（二６）。その具体的説明は省き、ドミートリイの

反応を見よう。

「どうしてこんな人間が生きているのだ！」。怒りに我を忘れたかのように低く呻いたドミートリイは、父フョードルを指さしつつ、一同に問う。「いや、教えて下さい、果たしてこんな男が、なお大地を汚すことが許されるのでしょうか？」。運命的な言葉が発されたのである。

「牝犬」と「罪の女」

「お聞きになりましたか、お坊さん方、父親殺しの言うことをお聞きになりましたか？」。注目すべきは、狂墳に駆られ、今や息子との「決闘」さえ口走るフョードルが、自らの怒りを更に増し加え、また自らを更に嘲笑の的としようとするかのように、なお新たな道化芝居に打って出るその執念である。新たに絞られる道化的焦点は、嵐の目グルーシェニカである。彼女のことを、ついさっき、ミウーソフが「牝犬」と呼んだのだ。フョードルはこれに食いつき、彼女を弁護し、「立派な牝犬」とさえ呼んでみせる。「恥を知りなさい！」。イォシフ神父が、続いてカルガーノフが厳しくたしなめるや、待っていましたとばかりにフョードルは、居合わせた全員を向こうに、またも聖書を盾に大見得を切って見せるのである。ここで彼が用いる道化芝居の道具は、今度もまたルカ福音書であり、その第七章に記された「罪の女」のエピソードだ。『罪と罰』においてマルメラードフが、自らが売春婦の身に追いやってしまった娘、ソーニャを指して言及するのと同じエピソードである（ルカ七 36-50、『罪と罰』第一篇２）。

ルカによると、カペナウムを根拠地としてガリラヤでの活動を続けるイエスが、ある町のパリサイ人の家に招かれ、食事の席についていた時のことである。その地で「罪ある一人の女」（売春婦）が、「香油の入りたる石膏の壺」を携えて食事の席のイエスに近づく（七 37）。「泣きつつ御足近く後に立ち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にてこれを拭ひ、また御足に接吻して香油を抹れり」（同 38）。この女の行為に対するパリサイ人の思いや（同 39）、それを知ったイエスがシモンに向かって語る譬え話（同 41-42）は省略しよう。この罪の女のエピソードの頂点は、彼女とイエスとの間に何があったのかは一切語られぬままに、イエスに向かい、激しく熱い感情を迸り出す彼女の振る舞いと、これを受けたイエスの次の言葉にあると言えよう。

「この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり」（七 47）。

イエスはこの「罪の女」が、大いなる愛の存在であることを見抜いたのだ。

フョードルはこのイエスの言葉を踏まえ、イォシフ神父に食って掛かったのである。だがイォシフの向こうに、そしてドミートリイの向こうに彼が狙いを定めるのは、他ならぬゾシマ長老と考えるべきであろう。二人の対決はまだ終わってはいないのだ。

「何が恥ずべきですか！ あの《牝犬》は、あの《いかがわしい行いの女》はですな、ひょっとしてあなた方ご自身より、つまり行ない澄ましたお坊さま方よりもずっと神聖かもしれませんぞ！ ことによるとあの女も、若い頃環境に蝕まれ身を持ち崩したのかもしれません。しかし《その愛(あい)すること大(おほい)なればなり》なのです。《その愛(あい)すること大(おほい)なればなり》の女を、キリスト様もお赦しになったのです」（二６）

「その愛(あい)すること大(おほい)なればなり」。イェシフ神父はこの言葉の意味を卑猥にとるべきでないとたしなめる。だがまたもフョードルは、待っていましたとばかりに言い返す。

「いいえ、［彼女の罪が赦されたのは］そういう、正にあのような、お坊様、あのような［愛の］ためなのですよ！」(二 6)

聖母マリアの「胎」と「乳房」から更に進んで、好色漢フョードルがここで用いる武器は「多く愛した」「罪の女」の「あのような」「愛」である。福音書を自家薬籠中のものとするまでに読み込んだ「悪魔の子」にして初めて可能な「恥知らずな」、しかも舌を巻かされる鮮やかな切り返しだ。

ゾシマの跪拝

「永遠の生命」を巡る問いから始まった道化フョードルと聖者ゾシマとの対決劇は、ドミートリイの登場による狂乱の一幕を経て、ルカ福音書が伝える「罪の女」を用いての新たな道化芝居にまで進んできた。その根底にあるのは、罪と赦しと愛を巡る対決と言えよう。

そしてこの対決劇の最後、ゾシマ長老が示した言動。それは人々を心の底から震駭させるものであった。長老は突然ドミートリイに向かって歩み寄り、その足元に跪くや、頭を床に着くまで深々と下げ、弱々しい微笑みを浮かべながら、一座に向かい四方に会釈をして、次のような言葉を発したのである。

「赦してあげなさい！ 一切を赦すのです！」（二 6）

この言葉は『カラマーゾフの兄弟』において、いくら注目してもし過ぎることのないものであろう。何よりもまずこれはドミートリイに向かって発せられた、彼の父親フョードルへの赦しの勧告であり、更にはドミートリイの未来の苦難に向かって捧げられた祈りだと考えることが出来よう。事実ゾシマ自身、翌日アリョーシャにこう語るのだ。「私は昨日、あの人の未来の大きな苦しみの前に頭を下げたのだ」。だがこれはドミートリイに向かってばかりか、ドミートリイと争うフョードルに、またその場に居合わせた全員に、更に敢えて言えば万人万物一切に向かって発せられた、ゾシマ最期の赦しの勧告であり、祈りであると考えるべきであろう。このことを、作品の具体的な文脈に目を向け、「赦し」という言

葉に焦点を絞ることで、改めて確認しておかねばならない。

「赦し」

注意すべきはフョードルが、「罪の女」とその「赦し」について語り出す直前、ドミートリイもまた皆の前で「赦し」という言葉を口にしていたという事実である。即ち彼は婚約者カチェリーナとの帰郷に当たり、父親との和解を胸に期し、更には父親の老後の世話さえ考えていたとして、こうゾシマ長老に語っているのである。

「僕は、父が手を差し伸べて赦しを乞うてくるならば赦し、自らも赦しを乞うつもりだったのです」(二６)

アデライーダの遺産とグルーシェニカを巡り、骨肉相食む争いを繰り広げるフョードルとドミートリイ父子。この二人が期せずして、相次いで発した「赦し」という言葉。それぞれの意図した意味も、向かう方向も全く異なる「赦し」である。だがこれを受けたゾシマ長老は、互いの死まで口にするほど憎み合うことになってしまった父と子二人に対し、何よりもまず「赦し」の心に立つことを訴えたのだ。ゾシマは、殊に父親との和解を胸に期して帰郷したと語るドミートリイに対し、彼が父を「赦してあげる」心に再び立ち帰るばかりか、「一切を赦す」心に立つよう、床に身を投げ出して訴えたと考えるのが自然であろう。「嘘の子」フョードルとても、つい今、「罪の女」に対するイエスの「赦し」について、曲がりなりにも言及したのである。

この「赦し」の心については、「場違いな会合」においてのみならず、『カラマーゾフの兄弟』の更に大きな文脈の中でも確認しておく必要があるだろう。と言うのも「赦し」とは、何よりもまずゾシマ長老の心の最深奥、この作品の再中核に置かれた言葉と言うべきものだからである。このことは同じ「場違いな会合」において、この直前、恐らくは老いた夫を殺した罪に苦しむ「信仰心の篤い農婦」に対し、ゾシマ長老が語り聞かせる次の言葉から明らかとなる。

「心から悔いている者に対し、神様が赦さぬ罪などこの地上にはありません」(二３)。

神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上で磔殺されるまで貫いたイエス・キリストを正面から受け止め、修道院で沈黙と禁欲と祈りの内にその「キリストの御姿」を守り続けてきたのがゾシマ長老である。人間のあらゆる罪を超える、神とキリストの愛と赦しというゾシマの確信・思想は、グレゴーリイが取り組んだ(そしてやがてスメルジャコフも取り組む)シリアの聖イサクの思想とも響き合い、『カラマーゾフの兄弟』全篇を縦に貫く根本思想と言うべきものである。イワンが「大審問官」の劇詩を語り出すのもまた、地上における愛と赦しの可能性を巡っての、アリョーシャとの対決の中で

のことである。つまりイワンが、この地上に満ちる人間の苦難、罪なき幼な子たちの涙の現実を向こうに置いて、「この世界中で赦すということができるような、赦す権利を持っているような存在は果たしてあるのか？」という問いを投げかけたのに対し、アリョーシャがイエス・キリストの存在を提示したことを契機として、「大審問官」物語は語り出されるのだ（五５）。

父への「赦し」の心を表白したドミートリイと、「罪の女」への「赦し」を新たな道化芝居の道具としたフョードル。これら二人を前にして発された、「赦してあげなさい！ 一切を赦すのです！」。先に記したように、この言葉は草庵に居合わせた全員に向かって発された愛と赦しの勧告であり、祈りであると共に、地上の万人万物一切が抱える問題と苦悩に対して、ゾシマ長老が与える究極の「解答」であり、死にゆくゾシマの「遺訓」であり、かつ「祈り」だと考えて初めて、その意味の奥行きと重みとは明らかになるであろう。（この作品の中心テーマである愛と赦しについては、更に『カラマーゾフの兄弟論』第Ⅶ章 A3 と D5 ――アリョーシャとグルーシェニカの宗教体験を貫く愛と赦しのテーマ参照。またアリョーシャが編集した「ゾシマ伝」の最終章、六３Ｉも参照）

さてゾシマ長老が床に身を投げ出して跪拝し、消えゆく最後の命を振り絞って発した、万人万物一切に対する愛と赦しの訴えと祈り。これが一座の人々に与えた衝撃の強さを描くドストエフスキイの筆にも改めて注意すべきであろう ――「おお、神よ！」と叫ぶや、ドミートリイは両手で顔を覆い部屋から飛び出し、続いて驚愕に駆られた他の客人たちもまた、フョードルも含め、暇乞いも挨拶も忘れて部屋から群がり出て行ってしまう。悪鬼の乗り移った二千匹の豚群が、もんどりうってゲラサの湖に駆け下りてゆく光景さながらである。人々の心は震撼させられ、完全にその許容量を超えてしまったのだ。

「赦し」という一語。ゾシマ長老の心の最中核から発されたこの言葉が、一座を捕らえた戦慄感。この戦慄感こそ我々が先に見た、カラマーゾフ世界がその奥底に帯びる戦慄的電荷（スミノーゼ）と言うべきものであり、その電荷はゾシマ長老が触れる神の愛と「キリストの愛」から発されたものと考えるべきであろう。「場違いな会合」における父と子の対決は、二人が期せずして発した「赦し」という一語を介し、瀆神的道化芝居の次元から長老最期の愛と赦しの訴えと祈りへ、行き着くべきところまで行き着いたのである。

イエスを巡る女性たち

さて今までフョードルの道化芝居を積み上げる中で得られたデータを基に、我々は彼の道化芝居が指し示すもう一つの側面も検討出来る所にまで来ているように思われる。

イエス生誕に当たって老預言者シメオンが発した叫びと、その向こうにいる二人の母エリサベトとマリア。またイエスに向かいガリラヤの一女性が上げた叫びと、その向こうにいる母マリア。そして涙と共にイエスに塗油をした罪の女 ―― これらからは、フョードルの聖書的道化芝居を特徴づける、女性たちの存在が色濃く浮かび上がってくる。だが先にも記したように、もし我々が、フョードルが彼女たちに向ける飽くことなき好奇の目に

のみ焦点を当て、この男はやはり稀代の「好色漢」なのだと結論づけるとしたら、その道化の本質を見誤り、貧困なフョードル像しか得られないであろう。そして我々は間違いなく、フョードル当人から激しい嘲笑を浴びせられ、唾を吐かれて終わるであろう。

フョードルについて、我々は今、少なくともこうは言えるであろう。フョードルとは、イエスという存在を前にした女性たちとそのドラマを、ただ単に「聖なる書物」の伝える「聖なる物語」という固定した枠の内に捉えることなど念頭になかった人物であり、彼女たちを、その内に生きた熱い血が流れる一人の人間、それぞれが具体的な個性を持つ一人の女性として捉えていた人物なのだと。「俺にとっては醜女など存在しない。女でありさえしてくれれば、それだけでもう問題の半分は解けているのだ」(三 8)。彼が二人の息子、イワンとアリョーシャに向けて語る言葉である。繰り返しとなるが、我々はこの男を、ただの「好色漢」として片づけることの危険性、貧困さを自覚すべきである。我々は最後にもう一度、フョードルのこの言葉を検討しなければならない（8.「聖母マリアとの対決」）。

こうも言えるであろう。フョードルとは、聖書に登場する女性たちが如何なる人間的感情を持って生き、殊にイエスという稀有な存在を前にして如何なる感情に捕えられ、かつイエスとの間に如何なる血の通った関係を持った人たちなのか、独自の嗅覚を最大限に発動させて捉えることの出来た人物なのだと。ひたすら神の愛と「キリストの愛」に焦点を絞り、そこから「神と不死」の問題に真摯かつ直截に肉薄してゆく息子のアリョーシャやイワンとは別に、この父親フョードルもまた「聖なるもの」に対する、そして神の愛と「キリストの愛」に対するこの上ない鋭敏で独自な感性を内に宿し、かつ強く幅広い好奇心を働かせる人間だったのである。この感性と好奇心の上に立ち、聖書の伝える神とイエス・キリストと向き合い、更には聖母マリアと、イエスを慕う女性たちと、そして救世主を待ち望む人々たちにも焦点を絞っていた点で、フョードルが聖書に向かう姿勢は、実は極めて正統的なものであったとさえ言うべきであろう。「桁外れ」の個性と生命力によって、またゾシマ長老が見抜いた、存在の「嘘」によって、彼の目に映し出される聖書世界は極めて屈折し歪んだものとなっていたことは否定出来ない。だがその屈折と歪みそのものが、この世界について我々が常識的な目で結ぶよりも、遥かに強烈でユニークな焦点を結ぶことを可能とし、その結果彼独自の聖書的世界像を形成するに至っていた可能性が高いのだ。我々は作家ドストエフスキイが、作品冒頭での「何かある種独自な民族的な桁外れ」という定義と共に、恐らくはこのような角度からフョードルの造型を試みていたのだと考えたい。

だが「はじめに」で記したように、この点についても結論を急ぐことは避けよう。我々にはまだ、その後フョードルが修道院で演じる壮絶な「最後の一幕」を目撃するという仕事が残っている(7)。また聖母祭の日、二番目の妻ソフィアに対し、また彼女が熱烈な愛と信を注ぐ聖母マリア像に対して、彼が示した驚くべき振る舞いにも光を当てなければならない(8)。フョードルが「聖なるもの」に対して取る姿勢について、また彼の瀆神的道化の在り方について、プラスとマイナス両極の方向に目を向けつつ、まずは一つ一つのエピソ

ードについて、出来るだけ柔軟で多角的な考察を積み重ねることが本論の課題である。

7.「最後の一幕」　悪魔の系譜、フョードルからイワンとスメルジャコフへ

道化的インスピレーション

僧院における「毒蛇」の攻撃は終わりとはならなかった。「赦し」を訴えるゾシマ長老の跪拝によってパニックに、否、聖なる戦慄感（ヌミノーゼ）に捕らえられた人々が、ゾシマの草庵から一斉に逃げ帰った後のことである。帰途に就くべく呼び寄せた馬車が到着するや、突如「インスピレーションに駆られた」フョードルが踵を返し、「最後の一幕を演じて差し上げよう」と乗り込んだのは自宅とは全く逆の、今度はゾシマの草庵ではなく、修道院長が催す昼食会であった。そしてこの男の道化芝居は、修道僧たちの偽善の弾劾、修道院の存在の否定という「最後の一幕」にまで行き着くのである。この壮絶な一幕については、その詳細をここに記すよりも、彼の最後の「捨て台詞」を以って説明に代えよう。

> 「な、お坊さま方！ あなた方は何故に精進をなさるのか？ 何故にそれに対するご褒美を天国に期待しておいでなのか？ そんなご褒美にありつけるのなら、私だって精進しますぜ！ 駄目です、お偉いお坊さま方よ。修道院などに引き籠り、上げ膳据え膳、天国でのご褒美などを期待するのはいけません。この世で徳を積み、社会に益をもたらすのです。その方がはるかに難しいことですぞ」
>
> （二８「スキャンダル」）

ゾシマ長老の草庵への集結から、修道院長による歓迎の宴席での「最後の一幕」へ。「崖から飛び降りる」ように、遂に激しい修道院批判とその否定にまで行き着いたフョードル。この時この道化を支配していたものとは、恐らくは強烈な緊張と興奮と毒念、そして何よりも神聖冒瀆がもたらす目が眩むような、また心が痺れるような悪魔的快感、毒蛇の陶酔だったに違いない。ゾシマ長老が与えた聖なる戦慄感（ヌミノーゼ）と対抗するかのように、フョードルを「悪魔風（インスピレーション）」が吹き抜け、その瀆神的道化芝居は最後の極点に達したのである。

フョードルからイワンへ、悪魔の系譜

さてここでもう一度、先にフョードルがヨハネ福音書により自らの出自を「悪魔」だとした地点に戻り、フョードルからイワンとスメルジャコフに至るカラマーゾフ家の、いわゆる「悪魔の系譜」を確認しておこう(5)。修道院でフョードルが演じた「最後の一幕」から見る時、次男イワンの本質もまた天使アリョーシャと同じく、ひたすら「神と不死」を探求する真摯な青年であると共に、父フョードルに劣らず「悪魔の子」としての際立った相貌も持つ悲劇的矛盾的存在であることが浮かび上がるのだ。つまりこの青年とは、父フョードルが内に深く宿す虚偽、存在の「嘘」とそこから生まれ出る悪魔的「否定の精神」

を、思想的にも行動的にも極限にまで自覚化して煮詰め、遂には自らを「人神」として、修道院とゾシマ長老のみか、神とその「眞(まこと)」、「キリストの愛」の否定にまで行き着く「ロシアの小僧っ子」なのである。

このことをもう少し詳細に見ておこう。「己が父悪魔」の「否定の精神」を「太古からの定め」として深く内に宿すことを自覚するこの青年は、モスクワにおける思想遍歴の末に、他ならぬ自分自身を神とするまでに至るのだ。「地質学的変動」の思想である。そして「人神」となったイワンは故郷の家畜追込町に乗り込み、「一切が許されている」との思想を非嫡出子のスメルジャコフに伝授し、彼を「前衛的肉弾」として、この思想を遂には「父親殺し」を以って表現しようと謀るのだ。「己が父悪魔」に発するフョードルの道化芝居から、その「悪魔の子」二人による父フョードルの殺害へ。イワンとは、フョードルが道化芝居に用いたヨハネ福音書を介して見る時、正に悪魔の系譜を正面から受け継ぐ「嫡出子」に他ならないことが明らかとなるのである。

「己(おの)が父悪魔(ちちあくま)より出(い)でて、己(おの)が父(ちち)の慾(よく)を行(おこな)はんことを望(のぞ)む」
「彼(かれ)は最初(はじめ)より人殺(ひところし)なり」
「眞(まこと)その中(なか)になき故(ゆえ)に眞(まこと)に立(た)たず」
「虚偽(いつはり)をかたる毎(ごと)に己(おのれ)より語(かた)る」（ヨハネ八４４）

これらヨハネが伝えるイエスの痛烈な批判の言葉は、自らを十字架上の死に追いやるユダヤ人たちを指して投げつけられたものであるが、これらは同時にフョードルその人に当てはまるのみならず、いささか酷になるが、正にその息子イワンにも当てはまるものであり、モスクワ時代のイワンが行き着く思想と行動の本質を予言するばかりか、『カラマーゾフの兄弟』が蔵する根本テーマの一つ、人間が「己が父悪魔」と手を結んで試みる「聖なるもの」の否定と拒否という「反逆」の本質を鮮やかに浮かび上がらせるものと言えるであろう。父の聖書引用が、図らずも父と息子の血の繋がりと二人の間の同一性(アイデンティティ)、悪魔の系譜を明らかにする。ここにあるのもフョードルの道化芝居が持つ悪魔性と同時に、その逆説的豊饒さという皮肉である。

（イワンという存在が担う意味の深さと広がりは限りがない。「神と不死」の熱烈な探究者である「ロシアの小僧っ子」イワン、この若者が現実に悪魔と手を組んで辿る没落の道という悲劇的逆説(ドラマ)については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』の第Ⅴ章と第Ⅶ章Ｂを参照。また次回からの「研究会便り(５)~(７)」においては、「研究会便り（３）-Ⅲ」の延長線上で、イワンの神探求の思索の道程とその意味について、聖書の「ユダ的人間論」と「キリスト論」という視点から、また聖書とドストエフスキイ文学との係わりという視点から、改めて検討する予定である）

更にスメルジャコフへ

ところでこの悪魔の系譜は、フョードルからイワンで終わるものではない。イワンを更に凌駕する悪魔性を前面に打ち出し、イワンからは「前衛的肉弾」と目されつつも、いつの間にか彼を呑み込み、最終的に父親フョードルの脳天を叩き割るのは異母兄弟スメルジャコフである。フョードルの非嫡出子、このもう一人の「悪魔の子」が自らの運命の理不尽さと醜悪さを呪い、世に対して試みる復讐劇について。またこれら二人の異母兄弟が「父親殺し」の後、共に追い込まれる恐るべき「悪業への懲罰(カラ)」と、神との出会いのドラマについて。またイワンがスメルジャコフを「絞首台」に追いやる新たな「兄弟殺し」の悲劇について。そしてまたアリョーシャとスメルジャコフという異母兄弟間の交流と、シリアの聖イサクが果たす役目について。更には自らの命を絶ったスメルジャコフに対して捧げられるアリョーシャの鎮魂歌について等々―― これらイワンとスメルジャコフを中心として、カラマーゾフの兄弟たちが辿る恐るべき、また胸を打つ一連の死と再生劇が『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスとなるであろう。(拙著『カラマーゾフの兄弟論』の第Ⅴ章と、殊に第Ⅶ章を参照)。

「研究会便り」の（８）-（１３）は、この『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールたるスメルジャコフについて、改めて正面から考察したものである。　（２０１９年１月、付記)。

8. フョードルと聖母マリアとの対決

「コニャックを飲みながら」

「場違いな会合」が終わった後のことだ。フョードルとイワン父子は家畜追込町の屋敷に戻る。ドミートリイの延々と続く「告白」を聴き通したアリョーシャも、追って父の家にやってくる。「場違いな会合」に続く、カラマーゾフ家の夕食の席。新たな「場違いな会合」の開始である(第三篇「好色漢たち」)。ここでのスメルジャコフの棄教者論を巡る「論争」と、その後父フョードルが「コニャックを飲みながら」(三８)、息子イワンとアリョーシャとを相手に交わす「神と不死」を巡る会話については省略しよう。結局は「否定」に行き着くこの問答の後のことだ。酔いの回ったフョードルの口からは「子豚同然の小僧っ子」アリョーシャとイワン、「身体の内には血の代わりに未だ乳が流れている」「殻の剥けていない」二人の息子に向かって彼独自の女性論が、つまり「好色漢」たる父親の内面が、ここぞとばかりに曝け出される。先に挙げた（7）言葉が発されるのもこの時である。

「俺にとっては醜女など存在しない。女でありさえしてくれれば、それだけでもう問題の半分は解けているのだ」(三８)

次々と恥ずかしげもなく開陳される蘊蓄。修道院に大醜聞を残し、ホーム・グラウンドに戻った「道化」フョードルの独壇場である。

ソフィアの思い出(1)

コニャックがすっかり回った父親の脳裏に、アリョーシャとイワンの母ソフィアの思い出が甦る。二人の息子を相手に新たに語り出されるのは、フョードルでなければ持ち得なかったような、またフョードルでなければ語り出せないような妻、あるいは「女」ソフィアとの愛情生活の一齣である。敢えてここに記しておこう ——「狐憑き(クリクーシカ)」とされる「宗教的痴愚(ユローヂヴァヤ)」の母を、夫が普段は決して見せなかった思いがけない優しさで、突然責めたて始める。跪き、立て続けになされる足への接吻。遂にソフィアが言い表し難い喜びの笑い声を上げる。その歓声とは、翌日には必ず「狐憑き」の叫びに移行するような種類のものであった。「狐憑きの宗教的痴愚」の内に秘められた「女」としてのソフィア。フョードルによれば、どんな女についても、その女でなければならない急所を見つけ出す腕を持つのが自分なのだ。亡き母親について、父親からこのような話を聞かされた息子たち。彼らの心中をここであれこれと推し量ることは控え、先に進もう。

ソフィアの思い出(2)

フョードルの思い出話は、更に二人が結婚をした年のことに及ぶ。彼は一度だけ、妻のソフィアを侮辱したことがあるのだと言う。聖母マリアの祝祭日のことだ。ひたすら祈りの人であったソフィアは、殊に聖母祭を重んじ、この日は夫をも彼の部屋に追いやってしまうのであった。この「神懸かり」を追い払ってやらねば！ フョードルは妻と聖母マリア像とを前にして宣言する。今からお前が信心するこの聖母像に唾を吐きかけてやる。罰など当たるものか —— 殺意を含んだ眼差しを夫に放ったソフィアは、突然飛び上がるや両手を打ち合わせ、顔を覆いながら全身を震わせ、床に倒れ伏すとそのまま気絶してしまう。

驚くべきことが起こる。この話を聞いていたアリョーシャが、母と全く同じ反応を示し始めたのである。「狐憑き」の叫びを上げ、両手を打ち鳴らし、顔を覆ってなぎ倒されたように椅子に倒れ掛かり、突然声にならぬ涙にむせびつつ、ヒステリーの発作さながらに身体を痙攣させ始めたのだ。驚愕に陥れられたフョードルはイワンに、口に水を含んでアリョーシャに吹きかけてやるよう呟く。「これは自分の母親のことで、自分の母親のことでな・・・」。説明を試みようとする父親に対し、イワンは叫ぶ。「しかし僕の母親もまた、彼の母親と同じだったと思いますがね、どうですか？」。怒りと侮蔑に満ちた声。そしてギラリと輝く目。フョードルは身を震わせる。筆者は父親がこの瞬間、アリョーシャの母がイワンの母でもあるという事実を、全く忘れ去っていたかのようであったと記す。

フョードルの混沌と両極性

アリョーシャにとり、またイワンにとり、父が語った聖母像のエピソードが持つ意味は、

少なくはないであろう。だが息子たちが受けた衝撃について考える前に、我々はまず注意を父親のフョードルの方に向けよう。

ソフィアと初めて出会った時、と彼は言う、「俺はその罪穢れのない目に、剃刀(カミソリ)で魂をブスリとやられた」。この「罪穢れのない目」を持つ「狐憑き」で「宗教的痴愚」のソフィアが内に宿す聖性と、彼女が全身全霊を以って祈る聖母マリアの聖性。「好色漢」フョードルは、これら二人の女性が宿す聖性を、この上なく鋭敏に察知していたのだ。そして「女」としてのソフィア、あの「女」としてのマリアの向こうに(3、「幸福(さいはひ)なるかな、汝(なんぢ)を宿(やど)せし胎(たい)」)、彼には手の届かない二人の存在があることを十分に知ってもいたのである。ところが聖母マリア祭の日、フョードルは妻ソフィアによって、一人この聖なる世界から締め出されてしまったのである。まさしく「剃刀(カミソリ)で魂をブスリとやられた」のだ。聖母マリア像に「唾を吐きかけてやる」こと、そして妻ソフィアの「神懸かりを追い払ってやる」こと。嫉妬と怒りに駆られたフョードルをまたも「悪魔風(インスピレーション)」が吹き抜け、彼は崖から飛び降りるような、絶望的と言うしかない、自暴自棄の悪魔的試みに打って出たのだ。

その後フョードルが演じ続けた道化芝居の一切は、この聖母祭の日に演じた神聖冒瀆劇の延長線上にあるものと考えることも可能であろう。「聖なるもの」への牽引と反発、人一倍の好奇心とシニシズム、絶対的独占欲と破壊衝動。フョードルとは「聖なるもの」に「剃刀で魂をブスリ」とやられずにはいない存在であると共に、「聖なるもの」を前にして「肯定と否定」の両極に魂を引き裂かれずにはいない存在なのだ。道化フョードルの内に蠢く混沌と両極性が浮かび上がる。彼の行動の捉え難さとは、この混沌・分裂の自虐的道化的表出と見て初めて納得がゆく部分も少なくないであろう。

更にここから見る時、「神と不死」を激しく求める「ロシアの小僧っ子」イワンが、神を弾劾し否定し、更に「キリストの愛」をも否定し、その末には自らを神とするに至る足跡もまた、父と同じ位相のもとに眺め得ると言えよう。つまりフョードルもイワンも共に、「聖なるもの」の前に立ち、それへの「肯定と否定」に魂を引き裂かれ、遂には自らが否定の道をどこまで歩き通せるかに賭ける「悪魔の子」であるという、先から見てきた「悪魔の系譜」が改めて確認されるのである(5、7)。

ここから改めて、アリョーシャについても見ておこう。

二つの「カラマーゾフの血」

あの「場違いな会合」の日のことだ。アリョーシャに対して複雑な感情を抱くラキーチンは、彼に向かってカラマーゾフ家の人々について、激しく辛辣な批評の刃を振り降ろす。「君の家では情欲が炎症を起こすほどだ」。つまりラキーチンによれば、カラマーゾフ家の家長フョードルを始めとし、長男のドミートリイも次男のイワンも誰もかれもが皆「好色漢」であり、「その三人の好色漢が今や互いの尻を追いかけ回し合っているのだ」というのだ。そればかりかラキーチンの批判の刃は、「初心な坊や」のアリョーシャにまで及ぶ。

「君もまたカラマーゾフだ。れっきとしたカラマーゾフなんだよ。血筋ってことさ。君は母親譲りの宗教的痴愚、父親譲りの好色漢なんだ」
「君と同腹の兄弟イワンはどうだ？ 彼もカラマーゾフなんだよ。ここにカラマーゾフ家の問題の一切があるのさ。好色漢、強欲、宗教的痴愚ということなのさ！」(二７)

辛辣な皮肉屋、金と女と名誉を渇望する俗物の合理主義者、情報屋であり哀れな狂言回し等々。このラキーチンもまた、フョードルとは違った意味で様々に混沌を抱える青年であるが、このカラマーゾフ家の人物評は辛辣ながらも的確と言う外ない。カラマーゾフ家の内に流れる血について、彼らが負わされた運命について、殊にアリョーシャが辿る運命について、彼の的確な評言は我々読者に大きな見通しを提供してくれるものと言えよう。作者ドストエフスキイは、このラキーチンに更にはドミートリイをも証人として加え（三３)、稀に見る晩生青年である天使アリョーシャにおいてもまた、この二つの血との正面からの対決が開始されたことを記す。つまりこの真摯な求道青年の内にも、カラマーゾフの血の「地上的で、凶暴で、むき出しの力」の蠢きが、いよいよ顕在化し始めているとされるのだ。そして遂にアリョーシャはリーザに向かい、「この力の上にも神の霊が働いているのか、それさえ僕には分からない」「僕はひょっとして神を信じていないかもしれない」と、内なる分裂の開始を正直に告白するに至るのである（五１。『カラマーゾフの兄弟論』第Ⅵ章「надрыв(激情の奔出)」も参照)。イワンと同じくアリョーシャもまた、「悪魔の子」フョードルの血を受け継ぐカラマーゾフの息子なのだ。

再び聖母マリア像の前で

聖母マリア像の前に戻ろう。容易には相容れない二つの「カラマーゾフの血」。父も母も、そして自分たち自身の内にも、この課題の前に立つ人間であることを、兄弟二人は知らされたのである。事実ラキーチンの言葉通り、既に「神と不死」の熱烈な探究者であるアリョーシャとイワン自身が、リーザという少女を間に挟んで深刻な愛の分裂の内に投げ込まれつつあり、またイワンとドミートリイとはカチェリーナを挟んでいよいよ苦悩の度を深め、更にまたドミートリイとフョードルとはグルーシェニカを巡って、正に生と死を賭けた戦いを繰り広げつつある。ドストエフスキイは「神と不死」の問題と「愛」の問題両面において、この作品の登場人物たち全員を深い分裂と激しい苦悩の内に投げ込んでいるのだ。『カラマーゾフの兄弟』とはこれら二つの「カラマーゾフの血」を巡り、登場人物全員が分裂に苦しむ、変数を多数抱えたいわば「不定方程式」のようなものと言えよう。

そしてこれら二つの「カラマーゾフの血」の問題については、他ならぬ父フョードルこそが、他の息子たちの誰よりも深く激しい混沌の内にあり、しかも他の誰よりも大胆かつ破廉恥かつ豊饒にその混沌・分裂の生を生きる、正に「何かある種独自な民族的な桁外れ」と言うべき存在なのだ。そして当のフョードル自身が今、このカラマーゾフの二つの血が自分の内に流れているばかりか、その妻ソフィアの内にも流れていたことを表白したので

ある。このことを告げられた二人の息子たちの心理の詳細について、我々は徒に追うことを避けてきた。しかし一点、アリョーシャとイワンが受けたであろう衝撃について考えるならば、その最大の衝撃とは、母の内にも二つの血が流れていたこと、そして父はこの母の二つの血を共に自らのものとしようと欲したこと、この認識を与えられたことであろう。これはフョードルにとっては当然至極のことだったにしても、「子豚同然の小僧っ子」「身体の内には血の代わりに未だ乳が流れている」「殻の剥けていない」二人の息子にとっては、「桁外れ」の衝撃だったのではあるまいか。先に見たアリョーシャの激しい反応も、ここから見るべきものであろう。

おわりに

混沌体（カオス）フョードル

今回はカラマーゾフ家の家長フョードルが、聖書知識を駆使して繰り広げる道化芝居を追い、そこから浮かび上がる様々な問題を検討してきた。冒頭で記した通り、ドストエフスキイが刻んだフョードル像は、やはり「桁外れ」なものであり、容易に整理や統一的な概念化を赦さない。だが聖書を介して彼の道化芝居を見てゆく時、そこから彼の独自な内面の諸相が炙り出されてくることも事実である。つまり女と酒と金にまみれた生活を送るフョードルもまた、「ロシアの小僧っ子」アリョーシャやイワンと同じく、あるいは彼らを逆さ写しにする形で、「神と不死」の問題を深く内に抱えた存在であること、そしてまた息子たちに劣らず、否むしろ彼らよりも色濃く熱く「聖」と「俗」、二つの「カラマーゾフの血」を分裂させたまま脈打たせて生きる混沌（カオス）体であることが明らかとなるのである。

ここに視点を置く時、最初の妻アデライーダの死の報知に触れての、歓喜と悲嘆とを混交させた叫び。またガリラヤの女性に重ねての、聖母マリアの聖性への絶対の讃美と、その地上的肉体性への興味の表出。更には妻の足元に跪いての接吻と、聖母マリア像への冒瀆。そして聖者ゾシマにぶつけられた瀆神的道化芝居と、最後に行き着いた痛烈な修道院批判。帰宅後、息子二人に向かっての「神と不死」への問い —— これら全てが、彼の内なる混沌・分裂の表出であることが明らかとなるように思われる。

混沌体フョードル。このフョードルが息子のアリョーシャに、自らの内面を素直に語り聞かせる場面を見ておこう。「場違いな会合」の後、フョードル宅に場を移し、父と息子たちが信仰を巡る「論争」や「問答」を次々と繰り広げ、その果てにあの聖母マリア祭の思い出が語られた翌日のことだ。嵐の後の束の間の晴れ間。自分の許を訪ねてきたアリョーシャに向かい、フョードルは意外とも思われる率直さと露骨さを以って、自分の心の内を語り始める。

「俺もまだ今のところは男で通る。まだ五十五だ。だが俺はまだ二十年は男でいるの

だ」(四２)

続いて語られるのは、そのためにも是非金が必要なこと。そして世の偽善者たちとは違い、自分は大っぴらに「汚穢(けがれ)」の内に生きること。その向こうにある「死」や「天国」のことなどは自分には考えられないこと。ひとたび眠ればもう目を覚まさない、それで一切は終わりであること等々 —— 世の人々の度肝を抜く道化芝居を繰り返すフョードルの、唯一心を許す息子アリョーシャを前にしての、このあたりが偽らざる内面の吐露だと考えてよいであろう。全ての問題が未解決の混沌と分裂のままに存在し、飽くことなく燃え盛る強烈な生命力によって運ばれてゆく「桁外れ」の人物、それがフョードルであり、その生の現実であると言えよう。

「巣窟(ヴェルテップ)」

イワンは父を「イソップ爺」とも「毒蛇」とも呼ぶ。「毒蛇」の生命力が運ぶ、破廉恥で深い分裂を抱えた混沌体フョードル。その生の内と外の諸相のどこに焦点を絞るかでフョードル像は、思わぬ豊饒なものとも、またこの上なく醜悪かつ貧困なものともなって、その姿を我々の前に現わすであろう。我々は今回この混沌に、専ら聖書を用いた瀆神的道化芝居という角度からアプローチを図り、結果としてその逆説的豊饒性も視野に入れる可能性を確認した。最後にこの物語の語り手が、フョードルの淫蕩生活を表わす語として用いた「巣窟(ヴェルテップ)」という語に改めて着目し、この語が持つ象徴性をデッサンし、本論を終えることにしよう。

既に見たようにフョードルは、二度の結婚のいずれの場合にも、妻に死なれるや直ちに子供たちを「忘れ去り、棄て去り」、我が家を快楽の「巣窟(ヴェルテップ)」と化してしまったのであった。この「вертеп（ヴェルテップ）」というロシア語には、『岩波ロシヤ語辞典』(1973 年版）によれば、大きく分けて四つの意味があるとされる。

① 「洞窟」
② 「隠れ家、巣窟」
③ 「キリスト生誕のあやつり芝居を見せる覗き穴」
④ 「そのあやつり芝居、キリスト生誕劇」

筆者（芦川）は以前『罪と罰』論において、江川卓氏による「ヴェルテップ」劇の説明(江川卓、『ドストエフスキー』岩波新書、1984)を紹介し、次のように記したことがある。「ロシア、特にウクライナには上下二段に設けられた舞台で、「聖」と「俗」の両面からドラマを同時進行させる、いわゆる「ヴェルテップ」劇と呼ばれる人形芝居が存在していた」(『「罪と罰」における復活 — ドストエフスキイと聖書 — 』河合文化教育研究所、2007)。『罪と罰』論では、この作品世界が正にヴェルテップ構造そのものを持つことを論じたのである。

ドストエフスキイが描くカラマーゾフの世界も、フョードルの生もまた、典型的な「聖」と「俗」の「二重構造」の内にあることは明らかである。ドストエフスキイはフョードルを、飲んだくれの好色漢かつ吝嗇漢として、酒と女と金の飽くことなき追及に没頭させ、その住まいを淫蕩の「巣窟」と化させる一方、彼に長い間ユダヤの民の間で生活をさせ、「聖なるもの」への鋭敏な感性を付与し、彼を「神と不死」の問題に対して無関心のままに放置することはない。既に見たように作家はこの男に、イエスを巡る女性に目を向けさせ、その「聖」と「俗」の両面から興味を持たせ、妻ソフィアの「罪穢れのない目」に胸を抉らせる一方、彼女を「女」としても扱わせ、「聖」と「俗」の両面で彼女を独占すべく、聖母マリア像に唾を吐きかけさせもするのである。

つまりドストエフスキイはフョードルを、地上の「巣窟」の主に据えると共に、深々と聖書的磁場の内にも身を置かせ、彼独自の「覗き穴」から聖書世界の「キリスト生誕劇」を飽くことなく見つめる存在として造型しているのだ。「вертеп」という語は、辞書が持つ意味の全てを以って、「聖」と「俗」の混沌体フョードルを表現する象徴性を担うと言っても過言ではない。

更に言えば、フョードルの瀆神的道化芝居によって我々は、聖書世界とカラマーゾフ世界に展開するドラマが共に、果たして神によってなされる究極の人間救済劇、つまりは聖なる「キリスト生誕劇」であるのか、あるいは単なる悪魔の「あやつり芝居」でしかないのか、その「一切か無か」の「世界的な」「永遠の」問いの前に立たされるのだと言えよう。しかもフョードルが演じる瀆神的道化芝居とは、既成のキリスト教的思考の枠を踏み越えた地平で、否、むしろ遠く深く悪魔の否定の世界にさえ足を踏み入れた混沌の中で、改めて我々を「ロシアの小僧っ子」として、「神と不死」の問題の前に立たせるのだ。そして我々人間の心の内に、如何にして「聖なるもの」が宿され、イエス像が構成されてゆくか、つまりは「キリスト生誕劇」は如何にして可能かという問題を、フョードルはゾシマ長老やアリョーシャとは全く違った破格の形で我々に提示し、それは一見悪魔的ニヒリズムとシニシズムの色を帯び、瀆神的道化芝居の形をとりつつも、結局は逆説的豊饒性を孕んだドラマとしてあると言えよう。

作者自身が言う「何かある種独自な民族的桁外れ」、フョードルが内に宿す力と意味が、その奥行きと拡がりを十全に開示するのは、我々自らがこの男のシニシズムとニヒリズム、その瀆神的道化芝居の背後に、「キリスト生誕劇」の多層性と逆説性と豊饒性を積極的に読み取ろうとする時であり、フョードルに劣らず大胆に我々が我々自身の内なる「洞窟」に身を投げ入れ、自らの内なる混沌と誤魔化しなく対峙する時であろう。

（了）

２０１６年６月
２０１８年１２月加筆修正

次回、研究会便り(５)について

次回から三回にわたり、「聖なるもの」を踏みにじり、抹殺する人間の悪魔性と、その罪意識の問題を考えます。

具体的にはまず（５）で、『カラマーゾフの兄弟』冒頭に置かれた「一粒の麥」の死の譬え（ヨハネ福音書十二24）に関する考察から入り、次に「ユダ的裏切り」の問題を、広く聖書世界の中に追い（６）、最後にドストエフスキイ世界、殊にイワンのドラマの中に追います（７）。

「研究会便り」の（５）～（７）は、その第１章から第３章にあたります。